

地域担う人材のゆりかご

開拓地の学校

苫前商の未来は

下

苫前町では、生徒らが菓子や飲み物を販売する光景が当たり前になってきた。苫前商業高校が実施する「苦カフェ」だ。

8月26日、商店の一角に生徒がブースを構える。まだ暑



苫前商業高校の生徒が実施する「苦カフェ」＝8月26日、苫前町

町教委・道立高 タッグへの思い

学校とつながる

さが残る中、副店長で3年の吉村一朗(18)が大きな声で客を迎えていた。「苦カフェ」や行事で顔見知りになった地元の方は多い」と話す。

接客をする生徒たちを、優しい表情で見守ったのが森哲也(54)だ。

町教育委員会で社会教育課長を務める森が、苫商に関わるようになったのは3年前。森を呼び出した教育長が「苫商で地域学を始めるから手伝ってあげてほしい」と頼んだことがきっかけだった。

苫商はこの年の春、入学者が6人にとどまり、翌年も1桁だと閉校対象となる「イエローカード」をもらっていた。入学者を全国から募集するための要件として必要だったのが、苫前を知るための地域学だった。

苫商は道立高校のため、転勤で来ている教師は地元のコネクションが乏しい。たとえば、農業・漁業や酪農関係者を呼ぼうにも、誰に頼めばいいかわからない。学校と地域をつなぐことが、森に求めら



苫前商業高校の入学パンフレットを手を持つ佐藤恵一校長(左)と、苫前町教育委員会の森哲也課長＝9月1日、札幌市

が森だった。

「以前は、苫商の入学生がどんな顔をしているのかも全く知らなかった」と振り返る森。「とままえ学」と名づけられたこの地域学が始まると、苫商と町をつなぐきっかけとなった。就労体験に加えて地域との交流を目的にした苦カフェは、取り組みの中で生徒が提案した。

そんな森にとって、新たな出会いが昨春に訪れた。苫商の校長に赴任した佐藤恵一(58)だ。

佐藤は赴任直後から、「町がしっかりとやっていないと学校を残せない」と訴えた。そのストレートな思いを、誰よりも真正面で受け止めたの

が森だった。「お互いに腹を割って話し合える。森課長あつての苫商」。佐藤が投げかけると、森は「こんだけ本音を言ってくれる校長先生はいなかった」と返す。

道立高校と地元自治体の教育委員会は本来、行政の縦割りがあの中、あまり接点がないのが実情だ。

その殻を破りつつある苫前町は今年、佐藤の求めに応じ、入学を呼びかけるための中学校回りに使うためだった。

森にはこんな手応えもある。「役場と学校のつながりが深まっただけではない。ここ

にきて、生徒たちが積極的に町に出始めてくれるようになった」

何としても残す

日本海に面した苫前町は開拓の町だ。漁業、農業、酪農と、町内にはあらゆる1次産業がそろつた。

だが、そんな豊かな土地でも、かつては1万1千人を超えた人口はいま、2700人

合まで落ちこんだ。町内に二つあった中学校は今年春に統合。高校も失えば、地域の衰退がさらに進みかねない。町関係者が抱える切なる不安だ。

そんな中、今春の入学者数は6人にとどまり、再び閉校に向けた「イエローカード」を突きつけられた。

「高校を卒業した後、地元に残って活躍したり、大学を出た後に帰ってきやすい環境づくりを想定している。苫商の存続にあたっては、地元の生徒の入学確保が大きな鍵を握ります」

10月7日にあった苫前中学校の学校祭。苫商の卒業生とともに登壇した教育長の開発法起(66)は、集まった保護者らに訴えた。

開発は、苫商について「地域の将来を担う人材を育てる大切な存在」と語る。役場にはここ数年、2人が苫商から就職。大学に通っている卒業

生からも「地域に恩返しするために苫前に戻りたい」との声が相次いでいるという。

高齢化がすすむ1次産業にとっても、苫商の存在感はまだ高まりつつある。

きっかけは農家の何げない一言だった。「収穫期の人手が足りない」。町が苫商に相談すると、休日に生徒がバイトをすることを許可してくれた。

以来、稲作作業に地元名産・ミニトマトの収穫、選果作業を生徒たちも担ってきた。

「ありがたいことに、苫前町を第2のふるさとと思ってくれる生徒が増えている。そのため、卒業後に町に残れる働き口をどう確保していくか。何としても苫商を残していかなければいけない」

開発の思いには、娘2人を苫商に通わせて元保護者としての立場も込められている。

＝敬称略(岡戸佑樹)

学校存続に向けて、来春の入学者数が大きな鍵を握る苫前商業高校。今後も、その動向や関係者の思いを随時お伝えしていきます。

朝日新聞デジタルでは、記者が自身の高校生時代に重ね合わせた取材後記が読めます

